

|      |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目      カ節を持つ構文の記述的研究  
 —間接疑問の周辺—

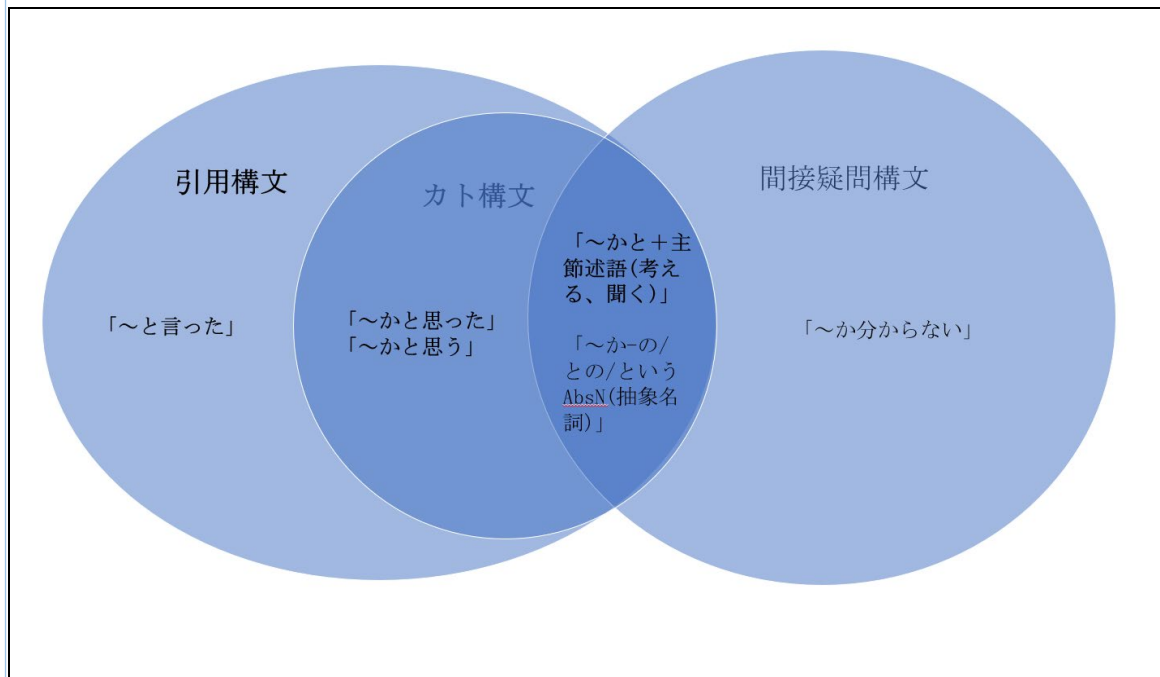
氏      名      全 弘 起

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、「彼女も今日は来るのか」のようなカ節を、文中に持つ構文、つまり、カ節を持つ構文について考察を行った。カ節を持つ構文には、カト構文や「～かと思う」構文のような引用構文、カノ構文や内容構文のような間接疑問構文がある。引用構文は、引用のマーカである「と」が用いられ、引用節と述語が「具体－抽象」の関係を持つ構文（藤田2000）で、間接疑問構文は、疑問のカ節が述部と意味的呼応関係を成している構文（藤田1983）である。両構文は「引用」と「疑問」という異なるタイプの文であり、互いに共通する部分がないように見えるものの、引用構文の中には、カ節を引用している文があり、その一部は「と」を省略し、点間接疑問構文にできるタイプがあった。両構文はまったく関係のないものではなく、一部似通う部分があるという点が、この論文の出発点となった。

形式的にカ節を引用しているように見えるカト構文は、一般的に主語が1人称であり、日常生活の中で、頻繁に使われている。特に、主節述語が「思う」で、文の個々の要素の意味から文全体の意味が導き出せないタイプである、非現実性認識や断定和らげの「～かと思った/思う」は、使用頻度が高いと思われる。そのため、引用構文の中でも中心に位置すると考えられる。一方、一般的に主語が3人称であり、主節述語が「言う」の引用構文は、カト構文よりは、他人が話した内容を伝える「～と言った」がより典型であると考えられる。また、接疑問構文は、主語が1人称の「～か分からない」が中心に位置すると考えられる。この内容を「引用構文と間接疑問構文の体系」として次の【図1】に提示しておく。

【図1】 引用構文と間接疑問構文の体系



【図1】の引用構文と間接疑問構文の共通集合の箇所に書いた、主節述語が「考える」、「聞く」のカト構文は、引用構文であるが、「と」を省いても文全体の意味は大きく変わらず、間接疑問構文の対処タイプとしても認められる。また、同じように共通集合の箇所に書いた、「～かのAbsN(抽象名詞)」のカノ構文の一部、すなわち、選言文に関わるカノ構文は、間接疑問構文であるが、第4章で述べたように、修飾節の文が疑問文の形をしているものの、選言文に近いので、疑問の答えよりは修飾節自体の局面に注目している。つまり、間接疑問構文でありながら、引用構文の性質を持っていると考えられる。

しかし、典型的な引用構文というのは、カ節の疑問に対する答えではなく、カ節で述べられている内容自体、つまり、カ節の具体的な内容全体に意味的な焦点を当てている。一方、典型的な間接疑問構文というのは、カ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てている。このような両構文の差は、両構文の根本的な性質が次のように異なるためである。つまり、引用構文であるカト構文は、基本的に思ったことや、言われたことなど、知っていることを伝える性格の文であるが、間接疑問構文は、基本的に疑問に思っていることや分からないことを表現する性格の文である。また、こうした意味的な違いは、第5章の2節で述べた、両構文の構造形式的な違いにも表れる。

最後に、韓国語の「-는지 (-neunji)」が日本語の「～か」のような意味と役割を果たしているため、日本語の間接疑問構文に対応する、韓国語の間接疑問構文は、「-는지 (-neunji)」で構成される従属節を持つ文であることを明らかにした。また、韓国語の間接疑問構文と、日本語の間接疑問構文が、どのような点で異なっているのかを具体的に調べた。さらに、それらの相違点は、両言語の間で、間接疑問構文の発達程度、同じ事態に対する捉え方などにおいて、差があるためだということが判明した。